

2019年度 国文学科中期入学試験 国語 講評

(一) 現代文

【出題意図】

問題文は『装飾する魂—日本の文様芸術』（鶴岡真弓著）の冒頭に置かれた「極東の装飾—表面へとどまる意識」から抜粋した。三島由紀夫の自邸の装飾や藤原定家の歌に対する評価を題材として、図よりも地に、奥行きよりも表面に美を見出してきた日本人の感性の特質について、西洋近代の伝統的な絵画の鑑賞態度と対比しながら説明した文章である。本文の内容理解を測ることを中心に作問した。

【採点のポイント】

問一

漢字の読み書き。文脈に即して正しく読めているか、書けているか。

問二

抜き出し問題なので完全解答（順不同）。「危うい表面」と対立する意味で用いられている表現なので、「意味に塗り込められた事物の「内実」を疑う」のように解答末尾が体言になっていない場合は減点。また「内実」を誤って「内在」と書いている場合も減点とした。

問三

「本文中の言葉を用いて」という条件があるので、「主題／物語」「観念的に了解させること」「画題」などの用語をそのまま使ってかまわない。また、解答末尾は「～方法」とは何か」という設問に対応させた適切な体言で答えられていないものは減点した。

問四

美術史のみに留まらず、「近代」という時代全般がなぜここで「人間的失敗」の歴史と呼ばれているのか、その大きな歴史認識を文章全体から捉える必要がある。傍線部前後の具体的な記述に頼るのではなく、本文における歴史観を把握できていることが大事となる。

問五

傍線部以降に示される、筆者の考えに即して答える必要がある。主語は「視力」であるので、日本人ではなく、日本的感性や日本的視覚について、その特性をその精神や性質と合わせて答えて欲しい。写実性・客観性よりも、一部を描くことで全体を捉えようとするような、非写実的な美術のあり方について簡潔にまとめること。そしてそれを可能にする感性は、主題的事物だけでなくその背景まで連続的に浮かびあがらせるような、「空白」を「空白」とみなさない、背景そのものに価値を見いだすものであるということについてまとめる。

問六

内容理解と説明の問題。ここまでに「図」と「地」の関係や「白紙」と「模様」の関係として説明されてきた日本人の美的な感性について、三島が注目した定家の和歌のしくみ

に即して記述する。現実の眼前にある荒涼たる風景のうえに、実際には存在しないはずの絢爛たる花や紅葉を出現させるのが、純粹言語の魔法のような作用によることを理解かどうか。

【講評】

問一

読み方では ㊦ぜいじゃく、㊧おもむ（いた）はよくできていたが、㊨おおぎょうの正答率は低かった。書き取りでは ㊩結晶、㊪類推、㊫驚嘆はよくできていたが、㊬抹消、㊭罵（った）、㊮豊穰、㊯蘇生は誤答が多かった。普段から本を読み、漢字の読み書きの練習をしっかりと行っておくことが大切である。

問二

設問中の条件である「対立する意味で用いられている」を読み落としたためか、「危うい表面」と同じ意味の部分抜き出ししている解答が散見された。「危うい表面から諸物に向かう」という傍線部を含む表現に着目して「危うい表現」と「諸物」が対比的な概念であることを読み取りることができれば、本文中の語を次のような二項対立の軸に配置することができ、左側の軸に対応する文中の表現を拾い出せるはずである。

危うい—装飾・表面・表層・平面・手袋のような膜・奥行きなき平面性

諸物—実体・奥行き・中身・意味に塗り込められた事物

設問および本文を読み取れているかどうか、解答に如実にあらわれる問題であった。

問三

必要な要素がそろった答案と、根本的に読み誤っている答案との差が出た。「もともと色やかたちで構成されているにすぎない絵の質や形式」が、「そこにあらかじめ与えられている意味（主題や画題）によって理解されうるもの」へと変わり、それが「絵画表現の本質を曇らせる」と考えた画家たちによって元の状態に戻された、という三段階の真ん中であることを的確に読み取れるかどうか、鍵を握っていたと思われる。せっかく必要な要素を書きながら、主述がねじれていたり、助詞の使い方が不適切だったりすることで減点せざるを得ない答案が散見された。

問四

人々の認識を決定づけていた規範が解体した結果、内側（内面や精神）に隠された単一の意味に関わる求心性や絶対性も解体し、「形式」や「表面」、「表層」が重要性を増してくる、という経緯を理解するためには、本文の主旨を過不足なく抽象化する作業が不可欠。従ってやや難問だったと言えるが、傍線部のやや前にある「教会や王の権威」の解体には言及できている答案が多かった。「装飾美術」の過小評価など、美術史のみに限定した解答は減点。

問五

傍線部すぐあとの段落にある、日本の装飾芸術の技法的特徴についての指摘だけで終わっている答案が多かったが、そのあとの段落にある日本的な視覚の特徴までふまえてまと

められると良かった。また、「無意味な空白」「無意味な背景」ということばで説明している解答があったが、西洋的感性から見て「無意味」と筆者は述べているということに注意して欲しい。

問六

「純粹言語」や「言語の魔法」という要素にも留意できている答えは結果として高得点となった。定家の和歌に詠まれている内容に具体的に触れずに、これ以前の論述内容から日本人にとっての「図」と「地」の関係や「白紙」と「模様」の関係について、抽象的な次元でまとめている答えは、設問の意図を十分に理解していないものとして減点対象とした。

(二) 古文

【出題の意図】

中世女流日記の一つ、「建礼門院右京大夫集」から筆者が亡き恋人を追想する一節を出題し、受験生の読解力や古典文法の知識を判定した。問一では基本古語と助動詞、反語の知識を、問二では仏教的知識や前後の文脈をふまえて「かひなきこと」の具体的な内容を推定させた。問三、前半では動詞の主語が読み取れているかを問い、後半では基礎的な動詞の活用型、活用形の知識を確認した。問四では和歌中の古歌をふまえた一句が指示するものを疑問詞四つに分けてこの一節中から具体的に読み取り答えさせた。

【採点のポイント】

問一

アではすぐ後にある「見し人」「後の世」「祈らるる」などの表現から、「行ふ」が仏道修行をするという意味であると読み取ることができているか、イでは打消意志の助動詞「じ」、引用の格助詞「とて」、反語表現である「いかがは」を的確に訳すことがポイントとなる。特に反語表現の構造は「思うまいと思ってもどうしてできようか（いやできない）」なので、反語部分の具体的な内容は「どうして思わずにいられようか、いや思ってしまう」となる。ウは直前の内容を受けて（枝に雪が積もった）そのまま、の意となる。

問二

直前に「見し人の後の世とのみ祈」とあるが、これと「かひなきこと」とは別であると分かるが重要である。

問三

文脈を正しく理解できていればア～ウは容易である。エの主語については「橘も」とあるので筆者も含意されてはいるが、明示されている主語は「橘」である。

問四

「いつ」「誰が」「どうしたときの」「どのような『香』」かが問われているので、これら四つの要素を明確に示せているかがポイントとなる。「いつ」—文章中の「いつの年とや」「雪のいと高く積もりたりし朝」を基にまとめる。「誰が」—「平資盛」と人物名を明示す

るのがよい。「どうしたときの」—（降りかかった雪を落とすことなく）内裏の橘の木の枝を折ったときという内容を示す。「どのような『香』—資盛の着ていた直衣の袖の香りであることを明示する。「当時のことをしのぶよすがとなる（香り）」などと説明を加えてもよい。

【講評】

問一

イでは否定的内容（思うまい、思わない）の反語（思ってしまう）として捉えられたかどうかで解答に差が出た。ウはおおむねよくできていた。

問二

解答の中に直前の「見し人の後の世」に当たる「資盛の冥福」や、「生まれ変わって」または「あの世で」「資盛と会えること」などというものが多かった。それは祈ればかなう可能性のあることなので正解とは言えない。「かひなきこと」つまり「願っても効果がないこと」とは具体的にどんなことを答えなければならない。また題意を勘違いして「かひなきこと」である理由を説明した答えがあったが、それなら「なぜ『かひなきこと』なのか」という問い方になる。ただしその理由の説明の中で「かひなきこと」が正しく説明されている場合には部分点を与えた。

問三

主語についてはエの「恋ふ」の主語をアの「筆者」とする者がかなりいた。動詞の活用型の種類とそれぞれの活用形についてもエの「恋ふ」のできが悪かった。現代語では「恋する」というサ変動詞の形しか使わないが、古典語では上二段活用動詞として使うことを押さえておいてほしい。現在推量の「らむ」が終止形接続の助動詞であることも同様。

問四

すべての要素を的確に記して完答できている答案、または完答に近い答案が多かった。一方、内容が的外れな答案も散見された。文脈が正確に理解できているかどうか成否を分けることになったであろう。「香」を橘の香りとしているものもあったが、これは正確ではない。「香」は、往時、資盛が橘の枝を折ったときに着ていた直衣の袖の香りであり、それを明示すべきである。内容を正確に読み取ったうえで、何をどのように示せばよいかきちんと整理してから記するのがよいであろう。

（三）漢文

【出題意図】

今年度は『説苑』からの出題。総字数百字足らずで、ほぼ例年なみの長さの文章。返り点・送り仮名を手がかりに内容を正しく読み取る力を備えているか、また、返り点の付け方や、基本的な語句の読みなど、漢文を読むための基礎的な学力が定着しているかを主眼に出題した。

【採点のポイント】

問一

基本的な語彙についての読み方を問う問題。仮名遣いは新旧ともに正解とした。ただし、A「こたゑて」や、C「まみへて」のような、旧仮名遣いの誤っているものは不正解とした。A・Bはともに漢文に頻出の語で、が、「おのづ(ず)か」・「おのづ(ず)から」いずれも正解とした。Cは、「まみえて」が正解であるが、「まみえ」とする解答も正解とした。

問二

書き下し文に従って返り点を正しく付けられるかをみる問題。返り点を付ける問題は、ほぼ毎年出題している。入門期の学習が定着していれば、平易な問題。完答の場合のみ点を与えた。本学科受験を希望する者は、返り点の付け方ぐらいはしっかりと学習しておいてほしい。

問三

問題文の文章が読解できているかを問う問題。「公義」と「私事」とが対比的に用いられていることに気がつけば、答犯が公私を混同しない人物として描かれていることが、容易に読み取れる。誤字は減点、二十五字に満たない答案は0点とした。

【講評】

問一

A・B・Cいずれも漢文に頻出の語である。正解率が高かった。逆に、問一で正解できなかった者は大きく差をつけられることになる。C「見」は、終止形は「まみユ」とヤ行であることから、「まみへて」は誤答となる。「見」にはいろいろな読み方がある、漢文におけるもっとも重要な語彙である。演習などを通じて、語彙の知識も増やしておきたい。しかも頻繁に出てくる重要語句だが、注に「自然と」とあるので、「おのづから」と読むことが分かるはず。Aに次いで正答率が低かった。「無」は、文脈が正しく読み取れていれば、「なかれ(禁止)」と読むことは明らか。おおむね良く出来ていた。

問二

この問題も正解率が高かった。少数ながら、「一二」点と「上中下」点の使う順序を誤っている者がいた。書き下し文にしたがって返り点を付けるのは、漢文学習の基本中の基本である。しっかりと勉強しておきたい。

問三

予想していたよりは正解率が高かった。「薦子者公也（子を薦むるは公なり）」の「子」を答犯の子と誤解したり、「公」を晋文公と取り違えたりしている解答が、そこそこ見られた。また、同じ語句を複数回用いるなど、与えられた字数の中での的確にまとめきれていない答案も少なくなかった。字数制限のある問題の演習も、普段からしっかりとやっておきたい。